

腐女子の「女子ジレンマ」 FUJOSHIs project their female dilemma onto BL.

久保(川合) 南海子
Namiko KUBO-KAWAI

愛知淑徳大学
Aichi Shukutoku University
namikokk@asu.aasa.ac.jp

Abstract

In novels and manga, there is a genre called “BL” that deals with love stories between men; the women who like these stories are called “Fujoshi.” Okabe[1] has pointed out that Fujoshi situate themselves lower in society than normal women, but in what ways do Fujoshi who like BL, which transcends sex and gender roles, perceive their own femininity and gender roles?

In this research, we divided 20-year-old female university students into three groups, according to their preference of genre for novels and manga. We conducted a questionnaire survey of six psychological scales (gender personality, images of love, attitudes toward the traditional mother’s role, empathy, attention to others, and privacy orientation) on 34 subjects placed in the “love story group,” who prefer love stories between men and women, 39 subjects placed into the “non-love story group,” who prefer stories not on love, and 30 subjects placed into the “Fujoshi group,” who prefer BL.

Results found that Fujoshi’s specificity can be identified in their views of gender roles, love, and privacy orientation. Fujoshi have a significantly lower tendency to agree with the traditional mother’s role (so-called “maternal love”) than the non-Fujoshi. Fujoshi and the women who prefer non-love stories perceive the value of their love as lower than those who prefer love stories. On the other hand, Fujoshi and the women who prefer non-love stories place more emphasis on their own time and interests than the women who prefer love stories.

These findings suggest that while Fujoshi accept their own femininity, they have negative attitudes toward the gender roles that society assigns to women. This implies that there is a state that could be termed a “female dilemma” at the root of Fujoshi identity in which, while they want to be feminine, they question the roles imposed on them because they are women.

Keywords — Fujoshi, “female dilemma”, gender personality, gender roles, images of love

1. はじめに

1.1 BL と腐女子

日本における現代文化、マンガ・ゲーム・アニメや J-POP・アイドルなどは、国民の消費行動が縮小傾向の時代にありながら、いまや巨大な市場を形成している。また国内のみならず、海外からも「クール・ジャパン」として高い注目を集めている。そのようなサブカルチ

ャーにおいて、男性同士の恋愛を描く「ボーイズラブ（通称BL;ビーエル）」といわれるカテゴリが存在する。現在のBL市場は約220億円といわれ、その規模は年々拡大している[2]。近年、そのようなBL作品を愛好する女性たちは「腐女子（ふじょし）」とよばれ、おもに10代から30代の若い女性たちがBLという巨大市場を支えている[3]。

BL作品を愛好する腐女子は作り手／読み手を問わず、その名称が示すようにほぼ100%が女性である[4]。つまり、BLを嗜好する過程には女性特有の要因が存在すると考えられる。なぜ彼女たちは男性同士の恋愛という関係性を投影するのか。そして、なぜそれを好む女性が存在するのか。特に興味深いのは、自身も恋愛が身近である年齢の女性が、あえて女性が対象ではない恋愛作品を選ぶことである。

堀[5]は、BL作品として女性キャラクターが登場しなければ、読み手は「女」に付せられた取り決めや社会的な視線を意識しなくて済む、としている。だとすれば、BL作品を読む女性は、女性としての自分が当事者になり得ない完全にデタッチメントされた世界に、傍観者／観察者としてコミットメントしていくことができる。藤本[6]は、BL作品内に登場する男性同士のカップルについて、彼らがいかに男女役割を模倣しているように見えても、それは組み合わせによって生まれてくる差異＝個性にすぎず性差の抑圧からは自由であること、これによって読者は抑圧を排除した形で「男らしさ」「女らしさ」を楽しむことが可能になったことを指摘した。つまり、男性同士という組み合わせは、単純な性別による恋愛関係内の固定観念的な性役割を超えて、個の人間同士として恋愛を含めた密接かつ多様な関係性を構築できる装置だと考えられる。

腐女子たち当事者にとっても、自分がなぜBLを愛好するのかについて理解することは難しいとされているが[7]、BLを読むことが癒しや娯楽となっているならば、彼女たちが明確に自覚していないとしても、それは現実世界での葛藤の低減やジェンダーの抑圧からの

解放と密接に関連しているのではないだろうか。

1.2 若い女性たちの抱える葛藤

現代の日本において、女性には出産を奨励する一方で労働の継続も求められている。そのような社会的な圧力がある反面、幼少時からゆとり教育の名の下で個性や趣味を重視する生き方を目指してきた世代でもある。学校では男女平等であると教育され、就職でも雇用機会均等は当然であるとされながら、日本における女性活用の低さは国際的にも問題視されている。キャリアの継続と出産・育児の両立も容易とはいいがたく、出産を機に仕事を退職する女性ははまだ54%にもものぼる[8]。また一方で、外見や行動に男らしさ女らしさを重視する風潮は特に若い世代で強い。結婚や子育てについても、若い女性たち自身のなかにすら伝統的な性別役割による固定観念がまだまだ根強く残っている[9]。

現代の女性にとって、眼前の現実には迷いと葛藤に満ちている。そのような中で、特に就労や結婚・出産が身近となる20代以降の女性にとって、自身のアイデンティティと実生活における女性性の求められ方のバランスをとることが難しくなっていると考えられる。

1.3 ジェンダーのジレンマを可視化する

男性同士の恋愛を素材にしたBL作品を好んで読む女性、すなわち腐女子は、ふだんから性差やジェンダーについて意識することが多いからこそ、逆に性別にとらわれない多様な人間関係が描かれるBL作品に魅力を感じるのではないかと。自分が女性でありながら、自身と同じ性別の女性が恋愛の対象から外れているBL作品に対する嗜好の背景には、女性としてのアイデンティティと実生活での女性性の求められ方のバランスにおけるジレンマがあるのではないかと、というのが本研究の仮説である。

本研究は、腐女子たちが日常のなかで社会に対して漠然と感じているであろう、求められる女性像と自己のアイデンティティのズレによる違和感、すなわち明確には自覚していないジェンダーの葛藤や抑圧を可視化する試みである。そこで本研究では、性格の女性性と男性性のバランスと恋愛観および伝統的な性別役割観への意識について測定する3種類の心理尺度を用意した。また、小説やマンガ作品への自己投影や想像性の程度を測定するために、共感性と他者意識に関する2種類の心理尺度を用意した。さらに、趣味や自分の時間に対する意識について、プライバシー志向性を測定

する心理尺度を用意した。以上の6種類の心理尺度からなる質問紙を用いて、20歳前後の女子大学生を対象に調査をおこなった。

2. 方法

2.1 調査対象者および手続き

(1) A県の私立大学人文社会系学部にて在籍する19歳から21歳の女子学生124名を対象とした。2015年7月に大学内の講義室にて一斉に実施した。

(2) 上記の調査にてBLを愛好する女子大学生の対象者から、同じくBLを愛好する18歳から24歳の女子大学生および女子大学院生を調査対象者として紹介してもらうスノーボールサンプリング法により、10名に実施した。2015年7月から12月にかけて個別に質問紙調査票を配布して、後日回収した。

2.2 調査内容

以下の6種類の心理尺度をもちいて調査した。

(1) ジェンダー・パーソナリティ (性格における女性性・男性性) の肯定的側面と否定的側面の双方を測定する「共同性・作動性尺度」[10] 24項目4件法。「肯定的共同性」「否定的共同性」「肯定的作動性」「否定的作動性」の4つの下位項目からなる。

(2) 特定の相手に限らず恋愛という現象自体への態度を測定する「恋愛イメージ尺度」[11] 28項目7件法。「大切・必要」「利他的・付加価値」「相互関係」「独占・束縛」「衝動・盲目的」「献身的」「成長」の7つの下位項目からなる。

(3) 社会文化的通念としての伝統的な性別役割観に基づいた母親役割を信じる程度を測定する「母性愛信奉傾向尺度」[12][13] 13項目5件法。

(4) 他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向をそれぞれ他者指向性/自己指向性という視点から測定する「多次元共感性尺度」[14] 24項目5件法。「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向的反応」の5つの下位項目からなる。

(5) 他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定する「他者意識尺度」[15] 15項目5件法。「内的他者意識」「外的他者意識」「空想的他者意識」の3つの下位項目からなる。

(6) 個人がプライバシーを体験する状況をその程度志向するかについて測定する「プライバシー志向性尺度」[16] 21項目7件法。

また、6つの尺度とは別に、「普段よく見たり読んだ

りするもの」としてマンガと小説（いずれもインターネット上の作品および同人誌含む）のジャンルについて、各15項目から複数可で選択式の回答を求めた。さらに、上記のうち「最も好きなものから順に3つ」を記入式で回答するよう求めた。

3. 結果

3.1 対象者の分類

一斉配布での調査対象者124名のうち、「普段よく見たり読んだりする」マンガと小説（いずれもインターネット上の作品および同人誌含む）のジャンルでそれぞれ15項目（複数選択可）から、BLを選択した女子学生20名全員と、スノーボールサンプリング法によって収集した女子学生10名（いずれも上記のマンガ・小説のジャンル各15項目（複数選択可）から、BLを選択していた）計30名を「腐女子群」、好んで読むマンガと小説（いずれもインターネット上の作品および同人誌含む）のジャンルを上位から3つ問う項目で、上位2つまでに恋愛ものと回答した女子学生34名を「恋愛群」、3つともBLもしくは恋愛もの以外のジャンルを回答した女子学生39名を「非恋愛群」として、計103名を分析対象とした。

3.2 3群（腐女子／恋愛／非恋愛）で有意差のあった結果

(1) 恋愛という現象自体への態度を測定する「恋愛イメージ尺度」において、3群×7下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、群の主効果が有意 ($F(2, 100) = 4.91, p = 0.01$)、下位項目の主効果が有意 ($F(6, 600) = 56.25, p < 0.001$)、群と下位項目の交互作用が有意であった ($F(12, 600) = 4.76, p < 0.001$)。下位検定の結果、「大切・必要」「利他的・付加価値」「献身」「成長」で3群の有意差があった ($p < 0.05$)。恋愛群は、腐女子群と非恋愛群よりも「大切・必要」の得点が高かった。腐女子群と非恋愛群での有意差はなかった。腐女子群は、恋愛群よりも「利他的・付加価値」の得点が高く、「献身」「成長」の得点が低かった。これらの下位項目について、腐女子群と非恋愛群、恋愛群と非恋愛群での有意差はなかった。

(2) 社会通念としての伝統的な母親役割を信じる程度を測定する「母性愛信奉傾向尺度」において、3群の得点について1要因分散分析をおこなったところ、群の主効果が有意 ($F(2, 100) = 10.03, p < 0.001$) であった。下位検定の結果、3群それぞれの間に有意な差が

あり ($p \leq 0.05$)、腐女子群の得点がかつとも低く、次に低いのが非恋愛群、一番高かったのは恋愛群であった。

(3) 個人がプライバシーを志向する程度について測定する「プライバシー志向性尺度」において、3群の得点について1要因分散分析をおこなったところ、群の主効果が有意 ($F(2, 100) = 6.44, p < 0.01$) であった。下位検定の結果、恋愛群は腐女子群と非恋愛群よりも有意に得点が低かったが ($p < 0.05$)、腐女子群と非恋愛群での有意差はなかった。

3.3 3群（腐女子／恋愛／非恋愛）で有意差のなかった結果

(1) ジェンダー・パーソナリティの肯定的側面と否定的側面の双方を測定する「共同性・作動性尺度」の得点において、3群×4下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、下位項目の主効果が有意 ($F(3, 300) = 62.63, p < 0.001$) であったが、群の主効果および群と下位項目の交互作用は有意でなかった。

(2) 他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向を測定する「多次元共感性尺度」の得点において、3群×5下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、下位項目の主効果が有意 ($F(4, 400) = 12.10, p < 0.001$) であったが、群の主効果および群と下位項目の交互作用は有意でなかった。

(3) 他者への注意の向けやすさや注意を向ける方向を測定する「他者意識尺度」の得点において、3群×3下位項目の2要因分散分析をおこなったところ、下位項目の主効果が有意 ($F(2, 200) = 3.54, p < 0.05$) であったが、群の主効果および群と下位項目の交互作用は有意でなかった。

4. 考察

4.1 腐女子のジェンダー・パーソナリティ

本研究では、ジェンダー・アイデンティティの測定でおこなわれるような[17]、自身のジェンダーへの展望や社会現実性、また受容性や一貫性などについて調査したのではなく、性格特性としての女性性（共同性）と男性性（作動性）を測定した。それは、自覚に基づいたジェンダーへの意識よりも、日常生活での行動や思考の傾向にみられるような無意識的なジェンダー・パーソナリティを顕在化するためである。使用した尺度には、女性性と男性性の肯定的側面と否定的側面を分けて測定する特徴がある。そのため、個人におけるジェンダー・パーソナリティを複数要因のバランスと

いう視点で検討できた。

結果として、腐女子の性格的な女性性・男性性は、そうでない女性たちとの違いはなく、肯定的・否定的のバランスにも差はなかった。腐女子に女性性の低さや女性性の否定といった傾向は見られないことが明らかになった。つまり、腐女子のジェンダー・パーソナリティに、腐女子ならではの特徴はないといえる。彼女らの行動や思考は、腐女子でない女性と同様に女性性が優位であり、その肯定／否定的のバランスは拮抗している。

これらの結果は、初期のBL／腐女子研究[18][19][20]でみられた（そして一般的な見解として、いまだに根強くある）未熟な女性性や女性嫌悪といった解釈とは一致しない。近年のBL／腐女子（論文では「やおい」と表記）研究の動向をまとめた金田[7]は「やおいにおいて回避されているのは、性や女らしさではない」と指摘しているが、この結果はそれをデータによって示唆していると考えられる。

4.2 BL 作品への共感性

他者に対する意識や共感性にも、腐女子の特徴は見いだせなかった。なかでも興味深いのは「架空の人物の感情や行動に自身を投影して想像する傾向」を測定する下位項目（想像性）でも差がなかったことである。自身の性別とは異なる人物たちの恋愛作品であっても、そこに自身を投影する程度は、恋愛ものが好きな女性たちが自身と同じ性別の人物が登場する恋愛作品へ、自身を投影するよりも低いというわけではない。腐女子は、恋愛ものを読む女性たちのように、BL 作品に自分を見ていることが示唆された。性別による制約をなくして共感するのであれば、恋愛における視点や立場の選択は、男女間の恋愛作品に対してよりも多様で自由になるだろう。

堀[5]は、腐女子にとってBLは物語のなかに自分に似た者を探して共感するのではなく、自分が不在であるからこそ没頭できるファンタジーであるとしている。本研究の結果は、恋愛ものが好きな女性は、女性による物語であるからこそ共感でき、BLが好きな女性は、女性によらない物語であるからこそ共感できるという程度に差はないこと示唆している。つまり、腐女子にとってBLは、自分が不在でありながらも自分と無関係の物語ではなく、自分の「何か」と共感する物語であると考えられる。

4.3 社会通念的な性役割観への反発

いったい、その何かとはなんだろうか。今回の調査の結果、もっとも顕著にあらわれた腐女子に特有の傾向は、社会的な通念としてみられる伝統的な母親役割への否定的な姿勢であった。いわゆる「母性愛」について批判的思考を抱いていることが腐女子の特徴であるという点は、先に述べたジェンダー・パーソナリティには差異がないことと合わせてみると、非常に示唆に富んでいる。自身の行動や思考のパターンには典型的な女性性を示していながら、出産・育児に関する女性性、すなわちそれらの性役割に対しては性差による偏りを認めていない。単純に、女性だからというだけで、出産・育児にともなう責任を「母性愛」と名付けた通念で母親に求めることへの強い否定が示されている。この結果から、腐女子のジェンダーに関連する特性は、彼女たち自身の女性性にあるのではなく、対社会的な性役割観にあると考えられる。

腐女子には、母性愛という神話的な概念で覆われているジェンダー格差への感受性が高く、かつそれを是としないうちに見えてとれる。そこには、自分が女性であることと、それ故に付加される性役割を盲目的に受容することは別である、という腐女子の心的傾向が示唆される。BL 作品にも女性的／男性的な性役割は数多く存在している。しかし、その人物が男性同士である以上、そこで描かれる性役割は通念的に付加されたものではなく、新たに構築された関係において自発的に選択されたものとなる。そのような「自己決定権ファンタジー」[4]がBLの重要な要素だとすれば、本研究の結果から示された腐女子の抱いているジェンダー格差の抑圧は、まさにBLによって癒され、さらに娯楽へと昇華されていると考えられる。男性同士であれば、生物学的に出産は不可能である。伝統的な性役割観の最右翼ともいべき母性愛への信奉を否定する女性たちが、恋愛の先には結婚・出産・育児があると考える通念的な性役割観とは無縁であるBLを愛好することは、ある意味で自然な選択といえるかもしれない。

4.4 「私にとっての」恋愛

男性同士の恋愛作品を好む腐女子は、どのような恋愛観を持っているのだろうか。恋愛ものを好む女性たちは、どちらかといえば恋愛を大切に必要だと思っているが、恋愛もの以外の作品を好む女性たちや腐女子の得点はそれらの項目において恋愛ものを好む女性た

ちよりも有意に低く、恋愛をそれほど大切に必要なものとは思っていなかった。これらのことから、腐女子の恋愛観は、「恋愛は私を幸せな気分にさせてくれる」「恋愛とは自分を磨く機会だと思う」など「私／自分にとっての恋愛の意義」について問われるようなときに、ややネガティブなものとして顕在化すると考えられる。しかし、恋愛もの以外の作品を好む女性たちとの間に有意な差がないことから、これは腐女子の恋愛観の特徴というよりは、恋愛ものを好む女性たちは自分の恋愛も重視している傾向があるといえよう。

また、プライバシーを志向する程度について測定した結果から、腐女子と非恋愛ものを好む女性は、恋愛ものを好む女性よりも、一人の時間や個人の趣味を重視していた。そのような「自立的」ともいえる志向性は、恋愛に代表されるような他者との深い関係が、自身に直接および影響について回避的になるとも考えられる。

4.5 おわりに

社会で働くことや恋愛や結婚が身近な出来事である若い女性たちにとって、自分が「女性らしくありたいこと」と社会から「女性だから求められること」のズレを感じることは、自覚的／無自覚的な葛藤を生じさせているだろう。そのような「女子ジレンマ」というべき状態に陥っている女性たちのなかで、腐女子とよばれる女性たちが、BL作品を愛好することは、恋愛という密接な人間関係を通念的な性役割から解放して、「女性だから」ではなく「人間として」の物語として楽しむことであると、本研究の結果は示唆している。腐女子とジェンダーとの関連についてはBL研究でもかなり関心が高く、これまでもさまざまな論考等で言及されてきたが、今回の複数の尺度による測定データをもとにして実証的な検討が可能となった。今後は腐女子への参与観察やインタビュー調査などを含めて、より詳細な検討をおこないたい。

参考文献

- [1] 岡部 大介(2008). 腐女子のアイデンティティ・ゲーム：アイデンティティの可視／不可視をめぐって. 『認知科学』,15, 671-681.
- [2] 矢野経済研究所(2016). 『クールジャパンマーケット／オタク市場の徹底研究』. 矢野経済研究所.
- [3] コミックマーケット準備委員会(2015). 『コミックマーケット40周年史』. コミック.
- [4] 溝口 彰子(2015). 『BL 進化論 ポーズラブが社会を動かす』. 太田出版.
- [5] 堀 あきこ(2012). リアルとファンタジー, その狭間で見る夢. 『ユリイカ』,44(15), 178-183.
- [6] 藤本 由香里(2007). 少年愛／やおい・BL 二〇〇七年現在の視点から. 『ユリイカ』39(16), 36-47.
- [7] 金田 敦子(2007). やおい論, 明日のためにその2... 『ユリイカ』39(16), 48-54.
- [8] 内閣府(2014). 『平成26年度版少子化社会対策白書』. 内閣府.
- [9] 国立社会保障・人口問題研究所(2011). 『第14回出生動向基本調査』. 厚生労働省.
- [10] 土肥 伊都子・廣川 空美(2004). 共同性・作動性尺度(CAS)の作成と構成概念妥当性の検討—ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定—. 『心理学研究』,75,420-427.
- [11] 金政 祐司(2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から—. 『対人社会心理学研究』,2,93-101.
- [12] 江上 園子(2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全. 『発達心理学研究』,16, 122-134.
- [13] 江上 園子(2007). “母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響—職業要因との関連—. 『心理学研究』,78,148-156.
- [14] 鈴木 有美・木野 和代(2008). 多次元共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. 『教育心理学研究』,56,487-497.
- [15] 辻 平治郎(1993). 『自己意識と他者意識』. 北大路書房.
- [16] 吉田 圭吾・溝上 慎一(1996). プライバシー志向性尺度(本邦版)に関する検討. 『心理学研究』,67,50-55.
- [17] 佐々木 掌子・尾崎 幸謙(2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成. 『パーソナリティ研究』,15, 251-265.
- [18] 中島 梓(1991). 『コミュニケーション不全症候群』. 筑摩書房.
- [19] 荷宮 和子(1995). 『おたく少女の経済学:コミックマーケットに群がる少女たち』. 廣済堂出版.
- [20] 上野 千鶴子(1998). 『発情装置』. 筑摩書房.